
おばあちゃんは優しいゾンビ

bunz0u

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おばあちゃんは優しいゾンビ

【Nコード】

N2984Y

【作者名】

bunzou

【あらすじ】

優しいおばあちゃん。でも、ちょっと普通とは違っているおばあちゃんはゾンビなの。

うに蹴りを入れた。

「I g g g y y y y u u i i i i i i」

ゾンビ老婆は一步だけ下がったが、腹のナイフは全く気にならないらしい。しかし、抜こうともせず、濁った目で女を見ている。

「おばあちゃん！ 噛みつき！」

「G G G R R R R R U U U A A A A A A U U U U U U！」

ゾンビ老婆はいきなりダッシュして、女の肩をつかむとその首筋に噛みついた。

「ブギウワアアアアアアアア！」

女は叫びを上げ、血が噴水のように噴き出した。ゾンビ老婆は首の肉を食いちぎってそれを飲みこみ、さらに二回三回と女の首筋の肉を食っていく。

「おばあちゃん！ 止め！」

声に反応して、ゾンビ老婆は食べるのを止め、女から手を放した。

女はその場に崩れるようにして倒れた。

「b r u g y u u u u u u u u」

血でその身を真紅に染めたゾンビ老婆はおとなしくなった。

「じゃあ、おばあちゃん、行こ」

二人がその場をさると、残されたのはうずくまった状態で手首から血を流してピクピクしている男と、首筋がずたずたにされて痙攣している女だけだった。

そう言つて中年の男は牛の塊肉をゾンビ老婆に差し出す。ゾンビ老婆はすぐにそれにむしゃぶりつくど、あつという間に食いちぎりながらそれを胃袋に収めていく。

少女はその光景を微笑みながら見守り、中年の男は並べておいた肉を袋に入れていった。それからその袋を差し出し、少女はそれを受け取る。だが、その中身を見て少女は首をかしげた。

「ああ、それならちよつとついてきてくれよ」

中年の男は店の奥に入っていく、少女とゾンビ老婆もそれに続く。そのまま店の裏庭に行くと、そこには鶏が二羽うろうろしていた。

[illegible]

ゾンビ老婆はなんとなく嬉しそうに聞こえるうめき声を上げた。

少女はそんなゾンビ老婆に笑いかける。

「よかったねおばあちゃん。さあ！ 噛みつき！」

「Gr r r r r r r u o o o o o o o o o o !」

歡喜の雄叫びに聞こえるものを上げながら、ゾンビ老婆は鶏に襲いかかった。腐りかけのような体に似合わず、老婆は俊敏な動きで鶏を捕らえると、その頭を齧りとった。

それから鶏の首に食らいつき、それを逆さまにしてまずは血を勢いよくすすする。

「さっきはおあずけしたからまだお腹が減ってるのね」

「なんだい、ここに来る前にもなんかあったのかい？」

「そうだけど、でも、お使いがあつたから急いで来たの」

「そうかい、そいつは偉いなあ」

二人がなごやかに会話しているうちに、ゾンビ老婆は鶏の羽を引きちぎりながら、その胴体にむしゃぶりついて骨ごとバリバリ食べている。

そして数分すると、二羽目の鶏に襲いかかり、今度は足を持って

引き裂き、貪りだす。いい加減裏庭には血と羽が飛び散り、ゾンビ老婆は血まみれになっていた。

だが、なぜか少女も中年の男も和やかな雰囲気で見守っていて、不思議と凄惨な現場とはなっていないかったのだった。

男はゾンビ老婆に気づいて叫び、犬はおびえて後ろに下がる。もちろんそんなことは何の意味もなく、ゾンビ老婆の手が中年の男の首を捉える。

「Vryuuroooo!」

ゾンビ老婆は中年の男の首を握る手に力を込めた。その首は嫌な音をたて始め、無理矢理右回りに回転させられていく。

「う！ ぎややめ！ ぎぎぎぎぎぎ！」

断末魔の叫びと共に、中年の男の首が鈍い音を出して回転した。一瞬でその顔は真っ青になり、膝からその場に崩れ落ちる。

ゾンビ老婆はさらに首を回し始めたが、犬はキャンキャン言いながらその場から逃げていった。後に残ったのは、首がねじ切られる音と、血と肉をすすする音だった。

それから数分後、少女は中年の男だった残骸を発見していた。

「おばあちゃんったら、拾い食いとは駄目だって言ったのに」

少女は大人びた雰囲気のため息をつき、その場を後にした。

そしてゾンビ老婆は夜の町を徘徊していた。夜なので人通りが少ないのが幸いして、今のところ犠牲者はさっきの中年の男一人だけだった。

「oooooooooooooooooooo」

ゾンビ老婆は叫び、全力疾走を始めた。そして、公園に到着すると手近な木に突進する。頭から激突したが、さすがに木を倒すほどの力はない。

「kyugyoooooooooooo」

ゾンビ老婆が雄叫びを上げると、それに驚いたアベックやらなんやらが顔を上げ、ゾンビ老婆の姿を見て勢いよく逃げ出していく。

ゾンビ老婆はそれらを追うことをせず、ただ周囲を見回している。

「おばあちゃん！」

そこに少女が走ってきた。

「murryuuuuu」

ゾンビ老婆はおとなしくなり、その場で立ち尽くした。少女はそ

んなゾンビ老婆の手をとる。

「おばあちゃん、帰ろう。お夜食も用意してあげるからね」

「g y o w a w a u i o y o y o !」

ゾンビ老婆は歓喜の雄叫びのようなものを上げて、少女に従った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2984y/>

おばあちゃんは優しいゾンビ

2011年11月14日03時15分発行